

# 古城池南古墳

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第9集

倉敷埋蔵文化財センター

2000.3

# 序

倉敷市の南半に位置する児島は、今でこそ陸続きの半島となっていますが、中世頃までは文字通り瀬戸内に浮かぶ大きな島でした。記紀や万葉集にもその記述が見られる吉備の児島には、旧石器時代から中・近世にいたる数多くの遺跡が存在しますが、特に製塩遺跡が多いことで知られており、弥生時代に日本で最も早く製塩が始まった地域とされています。

ここに報告いたします古城池南古墳は、この児島の北西端に位置する古墳で、都市計画道路駅前古城池霞橋線拡幅工事に伴い発掘調査を実施したものです。調査の結果、古墳自体は既に盗掘を受けていたものの、倉敷市では二番目に古い横穴式石室墳であり、石室もその時代の特徴を良く残していることが明らかとなりました。そこで、倉敷市教育委員会ではこの古墳の重要性に鑑み、当初は近くに移築保存することで協議を進めてまいりましたが、このたび設計の一部変更により現状保存されることとなりました。これもひとえに関係各位のご指導ご協力の賜物と心より感謝するとともに、今後も遺跡の保護活用に向け尽力していく所存です。

今回の報告書は、こうした古墳の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が今後の文化財保護、保存に活用されるとともに、郷土の歴史を研究する資料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめ古墳の保存、出土遺物の整理にあたりご指導ご協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成12年3月31日

倉敷市教育委員会  
教育長 山田錦造

## 例　　言

1. 本書は、都市計画道路駅前古城池霞橋線拡幅工事に伴い発掘調査を実施した、倉敷市福田町福田2052-1に所在する古城池南古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、倉敷市教育委員会文化課学芸員 福本 明・鍵谷守秀・小野雅明(いずれも調査当時)が担当し、1990年3月19日～5月10日にかけて実施した。
3. 出土遺物の整理及び報告書の作成にあたっては、長森恒子・森下久美子・内田智美・大江久仁子・洲脇奈奈・石井恵子の協力を得た。
4. 本書の執筆は、第1章を倉敷埋蔵文化財センター学芸員 片岡弘至、その他は鍵谷が担当し全体編集を行った。
5. 発掘調査における遺構写真は福本が行い、遺物の写真撮影は倉敷埋蔵文化財センター学芸員 藤原好二が行った。
6. 押図に使用した高度値は海拔高であり、方位はいずれも磁北である。
7. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、全て倉敷埋蔵文化財センターにて保管している。

# 目 次

## 序

|                 |    |
|-----------------|----|
| 第1章 遺跡の位置と環境    | 1  |
| 第2章 調査に至る経緯と経過  | 4  |
| 第1節 調査の契機       | 4  |
| 第2節 調査の経過       | 5  |
| 第3節 調査の体制       | 6  |
| 第3章 発掘調査の成果     | 7  |
| 第1節 墳丘          | 7  |
| 第2節 横穴式石室と閉塞施設  | 8  |
| 第3節 棺施設と遺物の出土状況 | 14 |
| 第4節 出土遺物        | 15 |
| 第4章 まとめにかえて     | 22 |

## 挿図目次

|     |                  |      |      |                 |    |
|-----|------------------|------|------|-----------------|----|
| 第1図 | 遺跡の位置            | 1    | 第8図  | 閉塞施設(S=1/40)    | 13 |
| 第2図 | 周辺の遺跡            | 2    | 第9図  | 遺物の出土状況(S=1/40) | 14 |
| 第3図 | 古墳の位置(S=1/5,000) | 4    | 第10図 | 出土遺物1(S=1/3)    | 16 |
| 第4図 | 墳丘測量図(S=1/100)   | 7    | 第11図 | 出土遺物2(S=1/3)    | 18 |
| 第5図 | 墳丘石室断面図(S=1/40)  | 9・10 | 第12図 | 出土遺物3(S=1/2)    | 20 |
| 第6図 | 横穴式石室実測図(S=1/50) | 11   | 第13図 | 石築(S=1/1)       | 21 |
| 第7図 | 羨道部土層断面図(S=1/40) | 12   |      |                 |    |

## 図版目次

|     |  |      |  |
|-----|--|------|--|
| 図版1 | 1. 遺跡遠景<br>2. 調査前の状況(西から)<br>3. 調査前の状況(南から)      | 図版7  | 1. 土層断面(東側)<br>2. 土層断面(奥壁部分)<br>3. 土層断面(南側)              |
| 図版2 | 1. 墳丘検出状況(西から)<br>2. 閉塞施設(西から)<br>3. 閉塞施設(東から)   | 図版8  | 1. 墳丘断面(北側)<br>2. 側壁断面(北側)<br>3. 墳丘断面(南側)<br>4. 側壁断面(南側) |
| 図版3 | 1. 石室床面検出状況<br>2. 遺物の出土状況(羨道部)<br>3. 遺物の出土状況(玄室) | 図版9  | 1. 古墳全景<br>2. 調査終了後<br>3. 横穴式石室                          |
| 図版4 | 1. 遺物出土状況(1)<br>2. 遺物出土状況(2)<br>3. 遺物出土状況(3)     | 図版10 | 1. 横穴式石室(奥壁)<br>2. 横穴式石室(袖部分)<br>3. 墳丘断面(南側)             |
| 図版5 | 1. 遺物出土状況(4)<br>2. 遺物出土状況(5)<br>3. 遺物出土状況(6)     | 図版11 | 出土遺物(1)  |
| 図版6 | 1. 遺物出土状況(7)<br>2. 遺物出土状況(8)<br>3. 棺台石           | 図版12 | 出土遺物(2)  |
|     |  | 図版13 | 出土遺物(3)  |

# 第1章 遺跡の位置と環境

古城池南古墳は、倉敷市福田町福田に所在する。福田町は、倉敷市街地の南部、水島臨海工業地帯の北東部に位置している。福田町の背後には、標高258mの種松山の山系が南北に連なり、古くは、瀬戸内海に浮かぶ大きな島であった。この種松山山系の南側は、谷を挟んで児島半島へと続いている。

古墳の眼下、西側に広がる平野一帯は、繩文海進以後に水島灘が形成され、海中に没するところとなった。この後、長い年月を経て近世に至って付近一帯の新田開発が行われ、現在の住宅地や水田が形成されている。したがって、この地域で古代からの遺跡の存在

は、種松山の山頂とその付近及び、山裾の周辺の低位部と限られた範囲で確認されるのみである。

付近で確認されている最も古い人々の活動痕跡は、旧石器時代の遺跡として確認されている。この時代の遺跡は、福田古城池北遺跡・種松山南遺跡・真弓池遺跡等丘陵上に所在しているものである。これらの遺跡から推測される当時の人々の生活は、眺望の良い高所の居住地から平原を移動する動物を探索し、狩猟・採集を中心とするものであった。

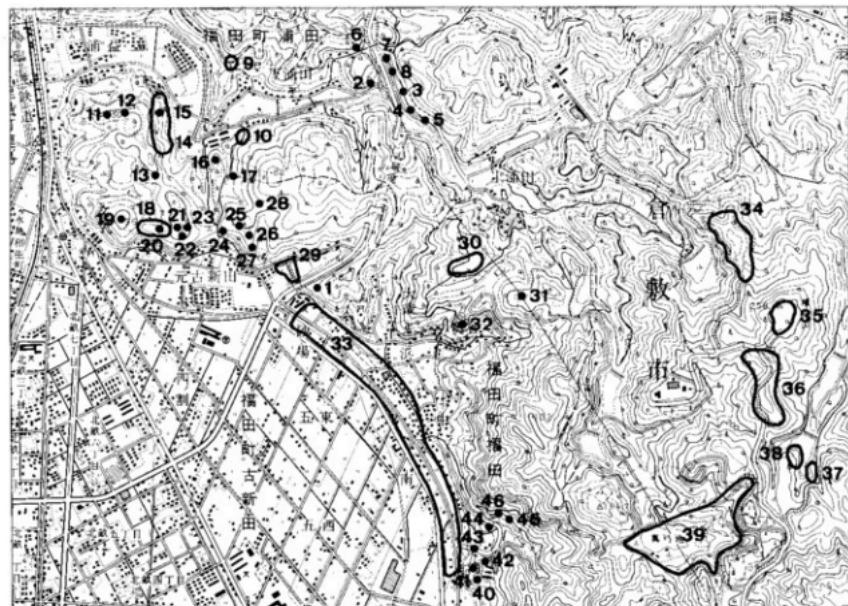
繩文時代には、まず地形の大きな変化が起こった。いわゆる繩文海進によって、種松山山系の西側はすべて海中に沈むところとなった。繩文時代の遺跡は、入江となった海岸部の福田貝塚と種松山山頂付近の一尺谷上池遺跡・真弓池遺跡がわずかに確認されるのみである。なかでも、福田貝塚は、繩文時代前期から後期にかけての標識的な遺物が検出された全国でも著名な貝塚である<sup>(1)</sup>。

弥生時代の遺跡は、海岸付近では繩文時代から続く福田貝塚しか確認されておらず、大半の遺跡は、種松山の山頂付近で確認されている。当時この地域では、山裾の海岸部分にわずかな砂州が形成されているのみで、水稻耕作に適した場所が獲得できず、旧来からの漁労や狩猟による生活を営んでいたためと思われる。しかし、種松山山頂遺跡からは銅鐸が出土しており<sup>(2)</sup>、海上交通ルートの要衝であるこの地域の海運に関する有力者の存在も推測される。なお、銅鐸は、市内ではこれまでこの遺跡からしか発見されておらず、銅鐸祭礼を行った特別な集団が存在したこともうかがえる。

古墳時代になると、この地域は特色的な生活を営むようになる。旧来より、農耕に適する土地が確保できなかったために、人々は製塩を生業とするようになった。湾戸遺跡にみられるように、海



第1図 遺跡の位置



| 番号 | 遺跡名      | 時代    | 備考   | 番号 | 遺跡名       | 時代     | 備考      |
|----|----------|-------|------|----|-----------|--------|---------|
| 1  | 古城池南古墳   | 古墳    | 今回調査 | 24 | 福田古城池6号墳  | "      |         |
| 2  | 下浦田貝塚群A  | 中世    |      | 25 | 福田古城池7号墳  | "      |         |
| 3  | 下浦田貝塚群B  | "     |      | 26 | 福田古城池8号墳  | "      |         |
| 4  | 下浦田貝塚群C  | "     |      | 27 | 福田古城池9号墳  | "      |         |
| 5  | 下浦田貝塚群D  | "     |      | 28 | 福田古城池10号墳 | "      |         |
| 6  | 下浦田貝塚群E  | "     |      | 29 | 福田貝塚      | 縄文～古墳  |         |
| 7  | 下浦田貝塚群F  | "     |      | 30 | 福田山城遺跡    | 中世     |         |
| 8  | 下浦田貝塚群G  | "     |      | 31 | 奥谷古墳      | 古墳     |         |
| 9  | 下浦田中貝塚群A | "     |      | 32 | 高塚古墳      | "      |         |
| 10 | 下浦田中貝塚群B | "     |      | 33 | 湾戸遺跡      | "      | 製塙遺跡    |
| 11 | 福田石星谷1号墳 | 古墳    |      | 34 | 真葛谷遺跡     | 弥生     |         |
| 12 | 福田石星谷2号墳 | "     |      | 35 | 種松山山頂遺跡   |        | 銅鐸出土    |
| 13 | 福田石星谷3号墳 | "     |      | 36 | 種松山南遺跡    | 旧石器    | 石器散布    |
| 14 | 浦田船着遺跡   | 縄文・中世 |      | 37 | 一尺谷上池第1遺跡 | 縄文～弥生  | 土器・石器散布 |
| 15 | 浦田船着古墳   | 古墳    |      | 38 | 一尺谷上池第2遺跡 | "      | "       |
| 16 | 下浦田1号墳   | "     |      | 39 | 真弓池遺跡     | 旧石器～中世 |         |
| 17 | 下浦田2号墳   | "     |      | 40 | 湾戸1号墳     | 古墳     |         |
| 18 | 福田古城池北遺跡 | 旧石器   | 石器散布 | 41 | 湾戸2号墳     | "      |         |
| 19 | 福田古城池1号墳 | 古墳    |      | 42 | 湾戸3号墳     | "      | 破壊消滅    |
| 20 | 福田古城池2号墳 | "     |      | 43 | 湾戸4号墳     | "      | "       |
| 21 | 福田古城池3号墳 | "     |      | 44 | 湾戸5号墳     | "      |         |
| 22 | 福田古城池4号墳 | "     |      | 45 | 湾戸6号墳     | "      |         |
| 23 | 福田古城池5号墳 | "     |      | 46 | 湾戸7号墳     | "      | 調査後消滅   |

第2図 周辺の遺跡

浜部の砂州上では、師楽式土器を用いた土器製塩を行っていた。集落跡は確認されていないが、入江や砂州の近辺で海浜生活を営んでいたことは、数単位でまとまって存在する古墳群の所在から推測される。周辺の古墳群は、いずれも横穴式石室を主体とする後期古墳である。福田石屋谷古墳群や福田古城池古墳群等がみられる場所は、入江単位にまとまって存在している。前述の湾戸遺跡の背後の尾根上には、湾戸古墳群が確認されており、当時の生活基盤と古墳群の関係が唯一推測可能な遺跡である。

中世になると、海浜部から少し入った山の谷筋で、人々の活動痕跡が確認されている。福田町浦田地区の谷では、中世の貝塚が多数点在しているが、いずれも小規模の貝塚である。貝塚群は、十分な調査がされておらず、その実態は未だつかめていないものがほとんどである。

以上のように、古城池南古墳の周辺は、古代から海浜生活を基本とした生活を営んできた地域であることが概観できる。

註(1) 泉拓良・松井章『福田貝塚資料(山内清男考古資料2)』奈良国立文化財研究所 1989年

間壁忠彦『新修倉敷市史 第1巻 考古』1996年

(2) 梅原末治「岡山県下発見の銅鐸」『吉備考古第83号』1951年

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査の契機

倉敷市の中央部南端に位置する水島臨海工業地帯は、1960年代の高度成長期に形成された日本でも有数の臨海工業地帯である。この工業地帯と倉敷市街地とを結ぶ主要路線である駅前古城池霞橋線は、ほとんどの区間で片側二車線となっているものの、ほぼ中間に当たる古城池トンネルの部分で片側一車線となっている。そのため、特に朝夕のラッシュ時には慢性的な交通渋滞を引き起こしており、この部分の早急な二車線化が長年の懸案であった。

平成元年度になってようやくこの部分の都市計画道路の決定がなされ、具体的な設計を行うための予備測量が行われることになった。その結果、現在ある古城池トンネルの東側に新たにトンネルを掘り車線を分離することが決まったが、その先の部分の拡幅については、南側の丘陵を削る方法と北側のため池(古城池)を高架で抜ける方法と考えられた。ところが、南側を拡幅した場合はその擁壁工事により古城池南古墳が、北側に拡幅した場合は福田貝塚が、それぞれ影響を受けることが想定されたため、水島支所建設課と文化課との間で遺跡の取り扱いについての協議が行われた。その結果、福田貝塚は市指定の縄文時代貝塚であり、工事自体はその指定範囲にはかからないものの周知の遺跡の範囲には含まれること。また、古城池は農業用のため池として現在も使用しており、高架と言えども地元住民等からの反対が予想される事などから、南側の丘陵を拡幅することがより好ましいであろうとの結論に達した。

こうして路線が決定されたのを受けて、古城池南古墳の正確な位置を測量し、工事計画図面と照らし合わせた結果、墳丘の約半分が擁壁工事の影響を受けることが明らかとなった。そこで、再び



第3図 古墳の位置 ( $S=1/5,000$ )

水島支所建設課と文化課との間で保存に関する協議を行ったが、本路線が都市計画決定された路線であり計画の変更は困難であることなどから、事前に全面発掘調査を行い記録保存の措置をとることとなった。

## 第2節 調査の経過

古城池南古墳の発掘調査は、平成2年3月19日から同年5月10日にかけて実施し、その費用は全額水島支所建設課が負担した。

まず、調査範囲の伐採後墳丘の中央部に基準点を設置し、統いて調査前の写真撮影及び地形測量を行った。次に墳丘土の検出を行うために、基準点を中心に調査区を4分割し、奥壁側の北東区・南東区から掘り下げを行い次いで羨道部側の北西区・南西区の掘り下げを行った。その結果、古墳の北側は畑の造成によってかなり削られており、また、羨道部の天井石は全て消失していることが明らかとなった。

墳丘土の検出後、3月27日より石室内部の掘り下げを開始した。羨道部の先端部分では、長さ約2.4mに渡って閉塞石が確認され、この石材中より完形の平瓶1点を検出した。石室床面では、玄室北東端で棺台石が10個確認されたほか、羨道部を中心に須恵器杯身・杯蓋・高杯・甕等を始め、土師器・鉄器などが出土したが、全体としては点在という状況であった。石室内掘り上げ後、側壁及び奥壁の割り付け・実測を開始し、4月21日に終了した。統いて墳丘断面である南北トレンチ及び東トレンチの実測を行うとともに、羨道部分の石積み状況と石室掘り方を確認するために、サブトレンチを設定し掘り下げを行った。これらの断面の観察から、玄室・羨道部ともその構築にあたっては全くひかえ積みを行っていないことが確認された。また、石室が全体として北側へ傾斜しており、墳丘土を除去すれば確実に石室の崩落をまねくと判断されたため、墳丘土を残したまま調査を終了することとなった。

調査後、古城池南古墳はこの付近の地域で横穴式石室が普及していく初段階の古墳で、倉敷市では2番目に古い横穴式石室墳であることが判明したため、水島支所建設課と協議を行い、工事に際しては付近に移築保存する方向で話を進めていた。ところが、ようやく工事が着工されることとなつた平成10年度に改めて詳しい測量を行った結果、設計の一部変更により古墳に影響がでないことが分かったため、古城池南古墳は現地にて保存されることとなった。

### 調査日誌抄

- 平成2年 3月19日 古墳周辺の伐採作業及び地形測量用の基準杭を設定する。
- 3月20日 発掘調査区の地形測量。
- 3月21日 墳丘土の検出作業開始。
- 3月26日 南西区で閉塞石と思われる櫛群検出。
- 3月27日 玄室内の掘り下げ開始。
- 3月29日 羨道部の掘り下げ開始。

- 3月31日 玄室南側床面付近で、完形の杯身・杯蓋が出土。閉塞石中から完形の平瓶を検出。
- 4月3日 玄室床面で棺台石10個を検出。
- 4月5日 閉塞石付近の写真撮影。閉塞石の実測開始。
- 4月10日 玄室及び羨道部床面の掘り下げ完了。遺物出土状況の写真撮影。
- 4月11日 床面出土遺物の実測及び取り上げ作業。
- 4月13日 石室立面の割り付け作業開始。
- 4月16日 石室立面実測開始。
- 4月21日 羨道部立面の割り付け作業及び実測開始。
- 4月24日 南北及び東アゼ沿いに、墳丘土の断ち割りを行う。
- 4月26日 南北及び東アゼの写真撮影及び土層の実測開始。
- 4月28日 羨道部の墳丘を断ち割り、石室の掘り方を確認する。
- 5月7日 羨道部断ち割り部分の断面実測。
- 5月9日 羨道部と奥壁の盗掘部分を土囊で埋め戻し、石室崩落の危険のないようにする。機材を撤収し、古城池南古墳の発掘調査を終了する。

### 第3節 調査の体制

#### 古城池南古墳発掘調査委員会

|      |      |             |         |
|------|------|-------------|---------|
| 委員長  | 今田昌男 | 倉敷市教育委員会    | 教育長     |
| 副委員長 | 花岡洋右 | "           | 社会教育部長  |
| 委 員  | 間壁忠彦 | 倉敷市文化財保護審議会 | 会 長     |
| 監 事  | 三宅正廣 | 倉敷市教育委員会    | 社会教育部次長 |
| 事務局長 | 小野盛樹 | 倉敷市教育委員会文化課 | 課長補佐    |
| 書 記  | 香西文雄 | "           | 文化財係長   |
| 調査員  | 福本 明 | "           | 学芸員     |
| "    | 鍛谷守秀 | "           | "       |
| "    | 小野雅明 | "           | "       |

(肩書き及び役職名は、いずれも調査当時)

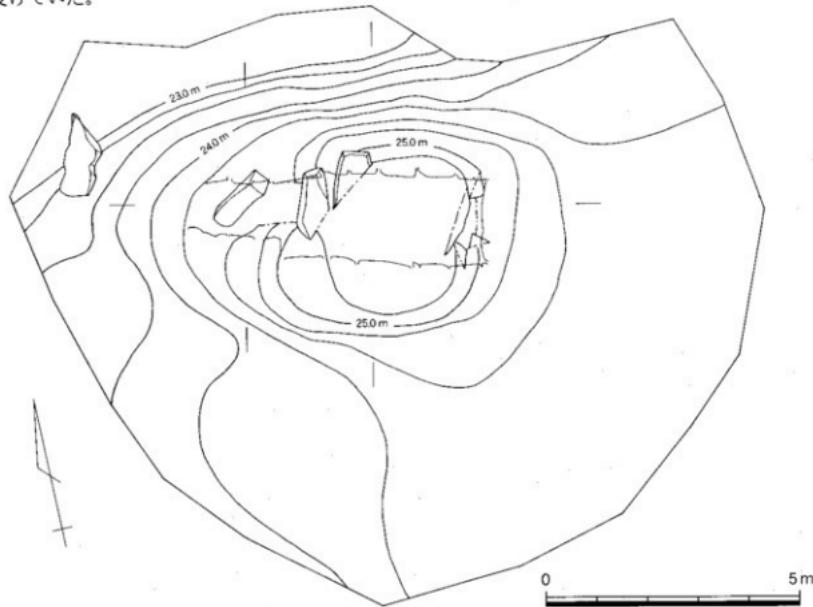
## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 墳丘

古城池南古墳は、標高約24.5mの丘陵尾根筋上に立地する。調査開始の時点で、玄室天井石の上にはわずかばかりの墳丘土が残存するのみで、その大半は既に流出していた。また、羨道部の天井石は全て失われており、奥壁側にも盜掘によると思われる穴が1ヵ所認められた。さらに古墳の北側は畠の造成によって削られた状況を示しており、全体的に墳丘土の残存状況はあまりよくなかった。墳丘土の観察は、石室主軸方向と基準点でこれと直行する方向及び基準点から西へ2.5mの羨道部で主軸と直行する方向とで行った。

#### 墳丘中央部南北断面

前述したように墳丘の北側は畠の造成により削られているため、墳丘土は側壁の石材から奥へ40~50cm程しか残っていなかった。一方南側は、天井石の高さより下の部分については比較的良好残っているものの、墳端となるべき部分は幅約1.5m・深さ約15cmの東西に延びる浅い溝により擾乱を受けていた。



第4図 墳丘測量図 ( $S=1/100$ )

墳丘土には主として黄灰色系あるいは黄白色系の土を用い、10~20cmの厚さで比較的堅く叩きしめられていたが、南側の墳丘上半部については盛り方が厚さ約20~30cmとやや雑な状況を呈していた。

#### 羨道部南北断面

天井石が全く存在しなかったため、墳丘は側壁北側と南側の断面の観察にとどまった。墳丘中央部南北断面と同様に、北側の端は畠により削られ南側の端は溝により攪乱を受けていたが、北側については側壁石材の背後から約1mの部分が残存していた。

どちら側も、残存する墳丘のほぼ真ん中あたりに厚さ5cm程度の暗褐色土層が見られ、それより下の部分は黄茶色~黄白色系の土により堅く叩きしめられていた。一方それより上の部分については、黄褐色~茶褐色系の土が主として用いられ、下半部ほど堅くは締まっていなかった。特に北側では一部に砂質土がみられ、盛り方も他の部分に比べればやや粗い状況を示していた。

#### 石室主軸東西断面

盜掘により奥壁上端部の石材を欠損していたため、墳丘土は天井石の上部と奥壁の背後にそれぞれ残存していた。既に述べたように、天井石の上部は調査開始時点での一部が露出しており、表土を除けば厚さ10cm程度の墳丘土が部分的に残っていたにすぎない。一方、奥壁背後についても、残存する奥壁の高さでほぼ水平に墳丘が削られており、盛土の多くは既に消失していた。このような状況ではあるが、奥壁部分の土層を見ると、まず地山ないしは灰混じりの土で石室掘り方内をほぼ水平に埋めた後、石室掘り方の肩部から奥壁石材に向けて斜めに墳丘を盛り上げていった状況がかろうじて想定できる。

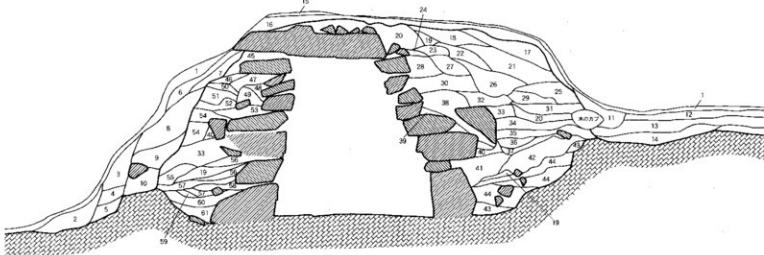
墳丘基準点より東へ約4.5mの地点で、水平に削られた墳丘盛土が斜めに下がり地山と接する部分があり、墳端と考えられる。これを手掛かりに、現存する石室の長さを考慮に入れれば墳丘の大きさは東西で9m程度に復元できる。南北の大きさについては復元できる状況はないが、この古墳を円墳と考えればほぼ同程度の規模であったと考えられよう。

周溝については、墳端部分に浅い溝状のくぼみが見られるが、その幅・深さとも極めて小さくまた平面的にも全く検出できないことから、これは部分的な窪みか何らかの攪乱であると考えられる。古城池南古墳は、地形的には奥壁側が高く羨道部側が低い地点に石室が構築されており、周溝が存在した場合奥壁側で検出できない状況は考えにくいことから、周溝は築造当初から存在していなかつたと思われる。

### 第2節 横穴式石室と閉塞施設

#### 横穴式石室

古城池南古墳の内部構造は、ほぼ西方向に開口する片袖式の横穴式石室で、その主軸方向はN78°Wを示す。残存する5枚の天井石はすべて玄室上のもので、羨道部の天井石は全く残っていないかった。これに伴い羨道部上端の石積みに若干の崩落が認められるものの、全体としては石室の残存状況は比較的良好であった。



1. 淡褐色腐殖土(表土)

2. 淡褐色灰白色土

3. 淡褐色灰色土

4. 明黄茶色沙質土

5. 黄茶色土

6. 淡黄白色沙質土

7. 黄白色沙質土

8. 黄茶色沙質土

9. 茶色土

10. 明黄茶色土(石垣造成土)

11. 淡黄茶色沙質土

12. 明黄茶色土

13. 暗黄茶色土

14. 淡黄褐色土

15. 明黄白色硬質土

16. 淡黄灰白色硬質土

17. 淡黄灰白色硬質土

18. 淡白色硬質土

19. 淡淡灰白色硬質土

20. 明黄白色硬質土

21. 黄茶色硬質土

22. 淡黄茶色硬質土

23. 黄白色土

24. 明黄白色土

25. 淡黄茶色硬質土

26. 淡黄褐色硬質土

27. 淡灰色土

28. 暗茶色硬質土

29. 淡灰褐色硬質土

30. 淡黄褐色硬質土

31. 暗灰色硬質土

32. 淡黄灰白色硬質土

33. 淡黄灰白色硬質土

34. 淡黄茶色灰白色土

35. 黑茶色灰白色土

36. 黄白灰白色硬質土

37. 淡黄白灰白色硬質土

38. 淡黄灰褐色硬質土

39. 黄灰白色硬質土

40. 淡黄灰白色硬質土

41. 淡黄茶色硬質土

42. 淡黄茶色硬質土

43. 淡黑茶色硬質土

44. 暗茶色硬質土

45. 淡茶色土

46. 暗茶白色土

47. 茶色土

48. 淡茶色土

49. 淡白灰茶色土

50. 淡黄茶色土

51. 黄灰色土

52. 黄茶色土

53. 淡黄茶白色土

54. 淡黄茶色土

55. 黄茶色灰白色土

56. 淡黄茶白灰白色土

57. 黄茶色灰白色土

58. 淡黄茶色硬質土

59. 淡黄茶白色土

60. 黄白灰白色硬質土

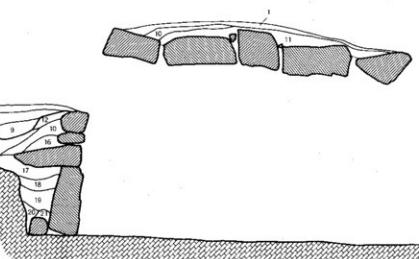
61. 明黄白色硬質土

62. 黄白色微砂

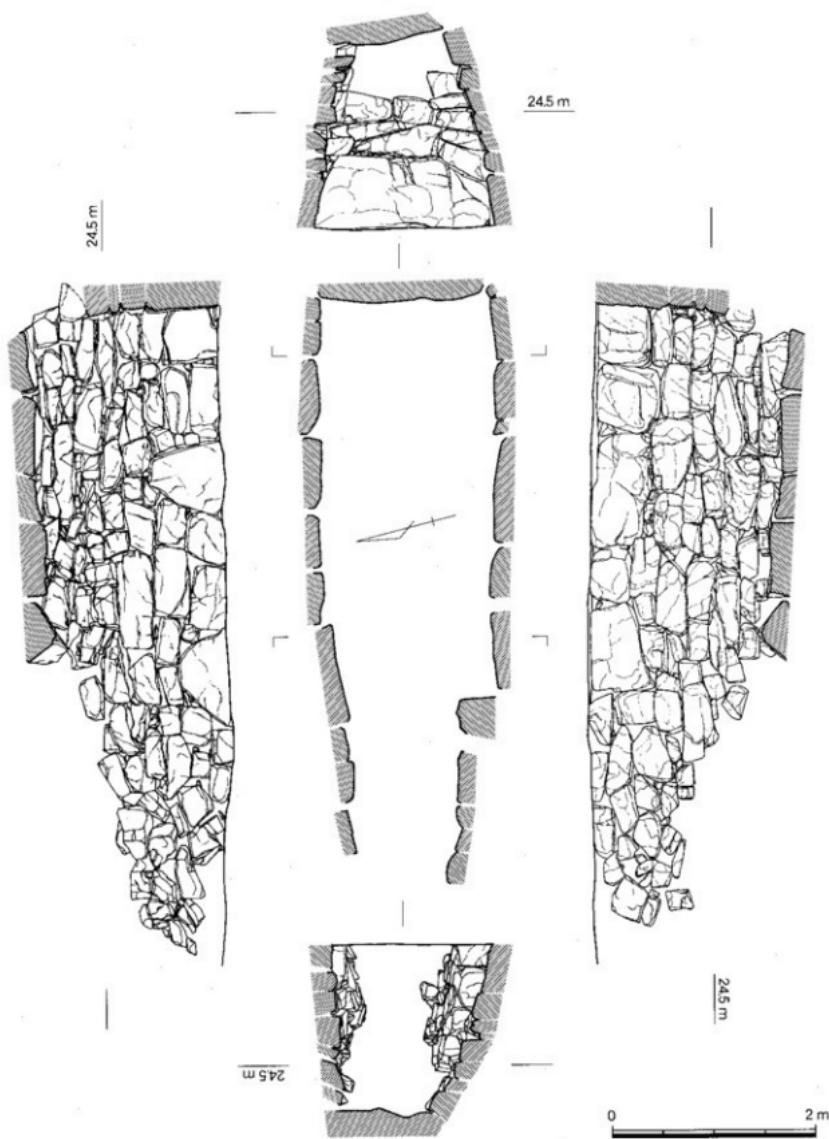
7~10 石垣造成後の堆積土  
17~40・45~56 填丘盛土  
41~44・57~61 填り方内埋土

1. 黑灰茶色土(表土)
2. 淡黄茶色土(腐植土變り)
3. 黄茶色土(“ ”)
4. 淡茶灰白色土
5. 明黄灰白色土
6. 淡黄灰白色土
7. 黄灰白色土
8. 淡黄灰白色土(地山混じり)
9. 淡黄灰白色土(攪乱土?)
10. 淡黄灰白色土
11. 黄灰白色土
12. 暗灰白色土
13. 淡黄茶色土
14. 淡黄茶色土
15. 淡黄灰白色土
16. 淡灰白色土
17. 淡黄茶色白灰白色土(地山變じり)
18. 淡黄茶色白灰白色土(淡灰混じり)
19. 淡黄茶色土
20. 淡黄茶色土
21. 暗灰色土

第5図 填丘石室断面図(S=1/40)



0 2m

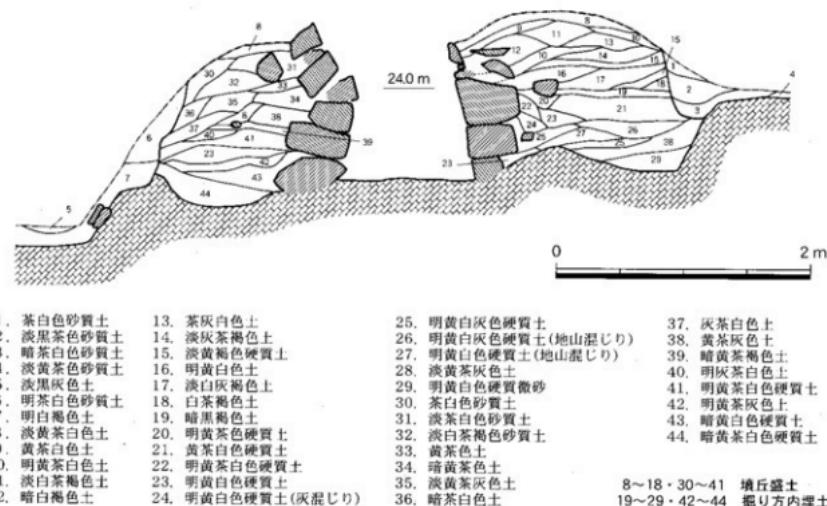


第6図 横穴式石室実測図( $S=1/50$ )

石室の床面での長さは、玄室部分が約3.9m、羨道部分が約1.9mで全長5.8mを測る。ただし、後述するように羨道部先端の両側壁には基礎となる石材が存在せず、土壁とも言うべきもの上に石材を積み上げており、それを含めると羨道部の長さは60cm程度長くなる。玄室の幅は、奥側から羨道部側にいくにつれ狭くなっている。奥壁部分で1.7m、羨道部側で1.4mを測る。玄室の高さも、奥壁部分で約1.8m、羨道部側で約1.7mと奥から前に行くにしたがって10cm程度低くなっている。羨道部の幅は、玄室側で約1m、先端部分で約90cmを測る。高さについては天井石が存在しなかつたため明らかではないが、残存する部分から1.3m程度と考えられる。

玄室は、両側壁、奥壁とも基礎となる第1段目におおぶりな石材を用い、その上に比較的大きめな横長の石材を1段ないしは2段積んで、ほぼ下半分を構築している。これに対して、上半分はやや小さめの横長の石材を4~5段積み上げているのだが、どちらの側壁とも、奥側から羨道部側に行くにつれて石材の大きさは小さくなるようである。玄室は南からの土圧により北側に傾いているが、それでもなお北側の側壁は内側に傾斜しており、築造当初は両側壁とも持ち送り気味に構築されていたと思われる。

羨道部の天井石は全て消失しており、土圧を直接受けた結果、特に右側壁の前端部上半は大きく北側へ開いていた。しかしながら、下半部は内側に傾斜しており、玄室同様当初は持ち送り気味に造られていたことが分かる。横長の石材を基本とし、それらを整然と積み上げている玄室に対して、羨道部の状況はかなり異なっている。すなわち、基礎となる第1段に安定感の強い石材を用いていないばかりか、むしろ上部に積み上げられた石材よりも小さいものを用いている。さらに羨道部先



第7図 羨道部土層断面図 (S=1/40)

端では、1段目の石材は無くなり土壁とでも言うべき土の壁の上に石材が積まれている。また、使用する石材も不定形なものが多く大きさにもばらつきがあるため、積み方も統一感を欠いたものとなっている。

石室の掘り方は、石室崩落の危険により墳丘土の除去ができなかったため、墳丘観察用のトレンドで部分的に確認したに過ぎない。それによれば、奥壁背後の掘り方は深さ約90cmで、非常に急な角度で2段掘りを行っており、奥壁の石材の背後とは20cm程しかすき間がない。そしてそこからほぼ水平に削平した面をそのまま床面としている。墳丘中央部における掘り方は、南側では深さ約90cmと奥壁側と同じであるが、それほど急な掘り込みではなく、掘り方の肩部から石材の背後までは約1.3mを測る。一方、北側は畑の削平により明らかでないが、残存する部分を見るかぎり急な掘り込みは行われていないようである。

墳丘中央部から西へ2.5mの羨道部における掘り方は、南側では、50cm程度急な角度で掘り下げた後緩やかに立ち上がり、側壁の背後から60cmの地点で再び掘り下げられ床面となっている。また、掘り方の肩部の位置は墳丘中央部とそれほど変わらないため、側壁の石材背後までの間隔は1.7mを越えており、側壁石材の大きさと比較すれば必要以上のスペースとなっている。北側の掘り方は、側壁の背後が一旦床面よりも約20cm低く掘られており、南側と同様やや変わった掘り方となっている。

#### 閉塞施設

調査開始当初は、羨道部が完全に土砂で埋まっていたため確認できなかったが、先端部で長さ2.8m、幅は羨道幅いっぱいの閉塞施設を検出した。使用している石材は石室のものと同じで、実際羨道部の側壁の石材と区別が付かないため、そこから崩落した石材も混じっている可能性もある。石材の大きさ・形状に統一性はなく、石材間に粘土等を充填していた形跡も認められないが、一部に赤色顔料のようなものが塗布されたものが認められた。閉塞施設の中心は、玄室から羨道部へ約2.1m程行った地点で、第8図を見ると羨道部の外のように見えるが、これは床面での石室平面図を重ねているため、実際には土壁上に積まれた側壁の先端部から30cm程内側へ入った部分にある。これら閉塞石の分布は、東西の長さ2.8mに比べて



第8図 閉塞施設(S=1/40)

高さは約60cmと低い。羨道部の高さが現存する側壁から考えて1.3m程度であったと考えられるから、これらの閉塞石は、もともと羨道部の高さいっぽいに狭い範囲で充填されていたものが、東西方向に崩れた結果と考えられる。

### 第3節 棺施設と遺物の出土状況

玄室の床面には、石室の石材と同じ角礫が20数個認められたが、これらのうち玄室北東寄りに存在する10数個は0.7m×2m程度の範囲内に規則的に配されており、棺台として用いられていた可能性が高い。棺台石は、大きさ・厚さとも比較的そろっており、配置の状況からみてほぼ原位置を保っていると考えられる。ただし、後述するようにこの範囲に遺物の集中が見られると言うことはなく、木棺の痕跡も確認することはできなかった。また、この部分を含め今回の調査では確実に鉄釘と断定できるものや耳輪等の装身具は出土しておらず、遺物の出土状況から他の棺施設の存在を想定することはできなかった。

石室及び閉塞施設から出土した遺物は須恵器・土師器・鉄器のみで、玉類等の装身具は床面を精査したにもかかわらず検出できなかった。これらの遺物は、すべて合わせても整理用コンテナ3箱程度と少なく、盜掘等によりその多くが既に持ち出されたものと考えられる。

羨道部における遺物の出土状況を見ると、先端部と玄室寄りにそれぞれ遺物の集中が認められる。先端部南側壁寄りで出土した須恵器杯蓋2・4と短頸壺22は、どれもほぼ完形に復元できるもので、特に杯蓋については2点が裏返しの状態で重なっていた。ここから約1m東へ行った地点では、須恵器杯身9・11や土師器壺28・29がそれぞれ破片の状態で出土した他、鉄鎌M4が1点確認されている。これら2カ所からの遺物を含め、羨道部出土の遺物の大半は閉塞石を取り除いた段階で確認しており、最後の葬送儀礼に伴い原位置を動かされたものと考えられる。この閉塞石中からは完形の平瓶23が1点検出された他、土師器片の大半



第9図 遺物の出土状況 (S=1/40)

がここから出土している。

玄室から出土した遺物は須恵器と鉄器のみで、その点数も少なく遺物が集中する部分も見られなかった。すなわち、遺物は全体としては点在という状況であり、おそらく原位置を保つものはほとんどないと思われる。分布の状況には、棺施設のある北半に遺物が少ないという傾向が認められるものの、残存する遺物の数やその状況を考えれば、そこに特別な意味合いを持たせることは困難と思われる。

#### 第4節 出土遺物

##### 須恵器(第10図)

###### 杯蓋(1~5)

天井部を丸くおさめるもの(I類、1~3)と比較的平らに仕上げるもの(II類、4・5)に大きく分けることができる。

I類は、口縁部径13.9~14.6cm・器高4.2~4.7cmで、1以外はほぼ完形品である。いずれも外面の1/2~1/3にかけてはヘラケズリを行い、他の部分はヨコナデにより仕上げている。内面は天井部に不定方向のナデが認められ、体部から口縁部にかけてはヨコナデを行っている。2の口縁端部内面には鈍い稜線が認められるが、1・3は丸く仕上げている。焼成は1・3は良好であるが、2はやや不良で灰黄色を呈している。

II類は、口径14.2~15.3cm・器高3.8~4.2cmで、天井部が平らな分器高が低くなっている、全体として偏平な感が強い。4・5とも天井部の外面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデを行い、その他の部分はヨコナデを施している。5の天井部内面には、粘土紐巻き上げの痕跡が明瞭に残っている。焼成は5は良好であるが、4はやや不良で2と同じ灰黄色を呈している。なお、ヘラケズリにおけるロクロの回転は、1~5全て右方向である。

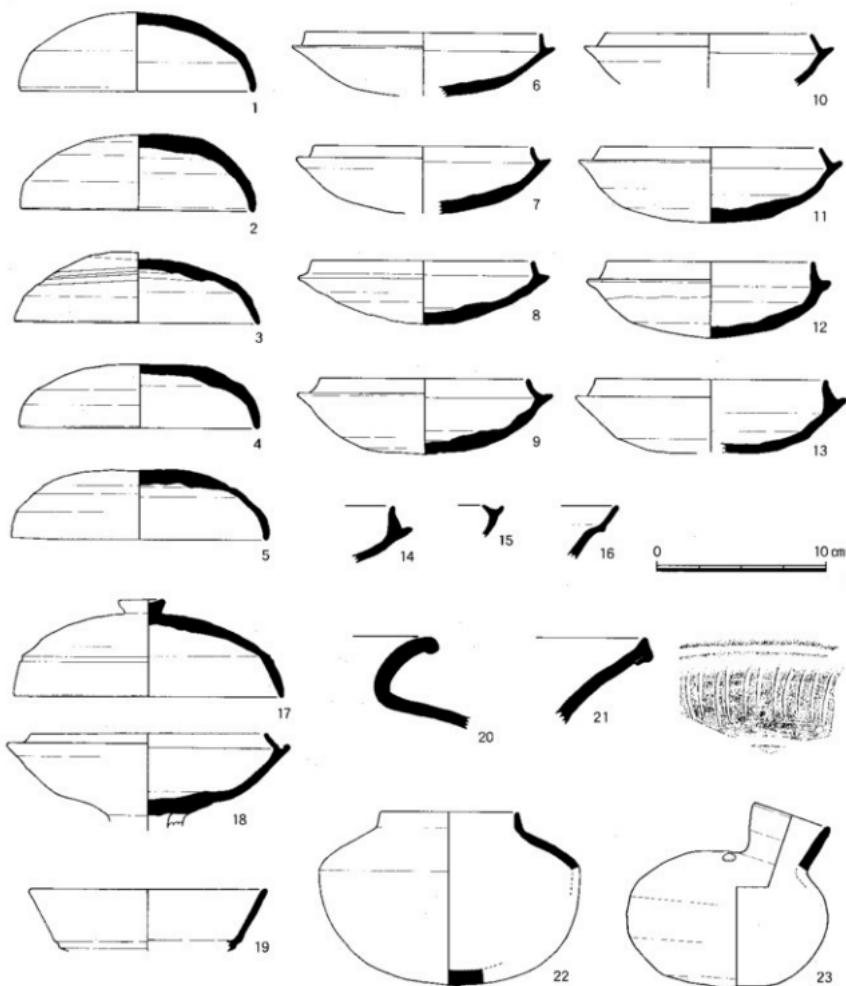
###### 杯身(6~15)

口径に比べ器高が低くたちあがりがやや短いもの(I類、6~8)、深めの器高をもちたちあがりが長いもの(II類、9~14)、たちあがりの内傾が著しく長さも短いもの(III類、15)の三種類に分けることができる。

I類は口径12.9~14.0cm、器高は8が3.8cmで、6・7は底部まで完存していないもののどちらも3cm程度に復元できる。たちあがりは、6がほぼ垂直に近いのに対し、7・8はわずかに内傾しており、その高さは7~8mmを測る。受部は、ほぼ水平あるいはわずかに斜め上方へ延び、その断面は7・8では三角形状を呈している。調整は、いずれも外面の1/2~1/3程度にヘラケズリを施し、内面の底部から口縁部にかけての同範囲には不定方向のナデが見られ、他の部分はヨコナデにより仕上げている。ヘラケズリにおけるロクロの回転は、すべて右方向である。

II類は、口径12.1~13.6cmとI類よりやや小さめのものが多いが、器高は4.5~4.6cmとI類に比べ5~6mm高くなっている。たちあがりは、内傾するもの(9~11)とほぼ垂直に立ち上がるもの(12~14)がある。前者のたちあがり高は8~9mmで、受部は外上方へ延び断面は丸くおさめている。後

者のたちあがり高は11~13mmを測り、その基部は太く作られているため断面は細長い三角形状を呈している。また、受部は外上方へ延びているものの前者に比べ太く短く作られている。外面の調整は、底部から1/3~2/3にヘラケズリを行い、他はヨコナデにより仕上げている。内面の調整は、底部に不定方向のナデを施し、体部から口縁部にかけてはヨコナデを行っている。ヘラケズリにおける



第10図 出土遺物1 (S=1/3)

るロクロの回転は、確認できた4個体すべて右方向である。

Ⅲ類は1点のみの小片であるが、極端に内傾したたちあがりと矮小化した受部を有する。器壁の薄さから想定して口径もかなり小さいと考えられ、I・II類とは明らかに時期が異なるものである。

#### 鰐(16)

頸部から口縁部にかけての小片で、頸部外面にはカキメが見られる。

#### 蓋(17)

口径16.0cm・器高5.8cmを測る完形品で、焼成・色調・口径等から18の有蓋高杯とセットになると想われる。天井部の外面2/3には、ヘラケズリを行った後強いヨコナデを施しており、口縁部から内面全体にかけてはヨコナデである。天井部と口縁部の境には一条の凹線が巡り、天井部の中央には偏平なボタン状のつまみが付く。ロクロの回転は右方向である。

#### 有蓋高杯(18)

脚部以下を欠くもので、口径は13.9cmを測る。たちあがりの内傾は比較的強く、受部の先端は内側へ折り返すように作られている。杯部と脚部の接合部分には、長方形の透かしがあった痕跡が残っている。底部外面にはヘラケズリ後強いナデを行い、底部内面は不定方向のナデ、その他の部分はヨコナデにより仕上げている。底部外面のロクロ回転は右方向である。

#### 無蓋高杯(19)

口縁部のみの破片で、口径の約1/3を欠く。体部は直線的に斜め外方へ延び、口縁端部は丸くおさめている。体部と底部の境には、浅い一条の凹線が巡る。内外面とも丁寧なヨコナデが施されている。

#### 甕(20・21)

どちらも大型の甕の口縁部で、これらに伴うと思われる胴部の破片もかなり出土しているが、底部の破片が出土しておらず、図化できなかった。また、これら以外にも大甕の口縁部と思われる小片が1点認められたが、焼き歪みが大きく図示できなかった。20は胴部から「く」の字状に大きく外反する口縁部を有し、その端部は玉縁状に丸くおさめている。胴部外面には平行叩き、内面には同心円叩きがそれぞれ認められる。21は大きく外方へ開く口縁部をもち、その端部は粘土紐を張りつけ肥厚させたのち、浅い凹線を巡らしている。また、頸部外面には、薄い板状工具の小口を軽く押し当てた、幅3.5cm程度の文様が連続的に施されている。

#### 短頸壺(22)

口径8.2cm・器高10.4cmを測る完形品で、羨道部先端から出土した。胴部最大径は10.4cmで、同部の上位に存在する。短く立ち上がる頸部はわずかに内傾し、その端部は丸くおさめている。外面は、胴部下半にヘラケズリを行い、その他の部分は丁寧なヨコナデを施している。ヘラケズリにおけるロクロの回転は右方向である。

#### 平瓶(23)

閉塞石中から出土したもので、口径4.8cm・器高11.0cmを測る完形品である。わずかに外反する口縁部を有し、その端部は丸くおさめる。胴部は橢円形を呈し、最大径はほぼ中位におく。また、肩

部には直径約8mmの円形浮文を一对貼りつけている。底部はヘラ切りの後ナデを行い、胸部から口縁部にかけてはヨコナデにより調整している。

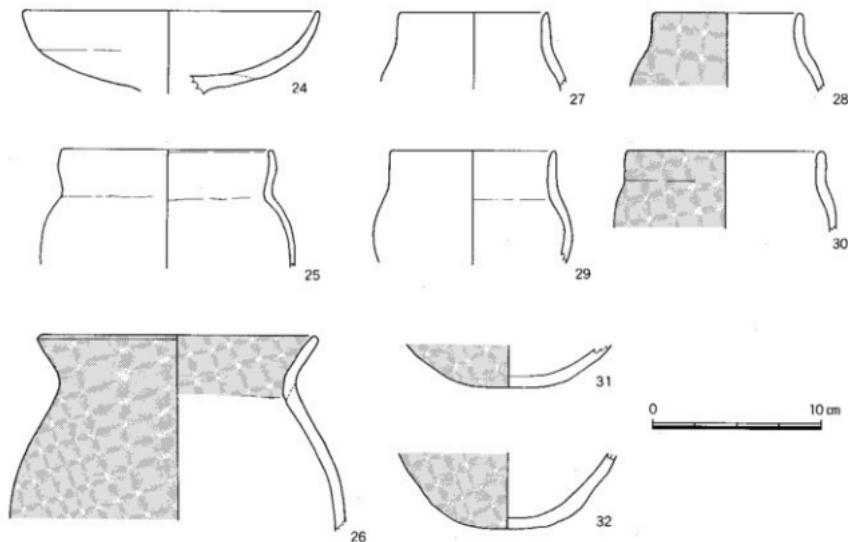
## 土師器(第11図)

## 高杯(24)

西半の閉塞石中から出土したもので、杯部はほぼ完形に復元できた。図化できなかったが、これと同様の胎土・色調を有する別個体の破片が、同じく西半閉塞石中から出土している。皿状を呈する杯部はその先端を丸く作り、内外面とも丁寧なヨコナデにより仕上げている。脚部と杯部との接合痕から、まず両者を連続して作ったのち、径2.5cm程度の小さな粘土盤によりこれをふさいだことが確認できる。

## 壺(25~32)

25は口径の1/3程度の破片で、復元口径は12.4cmを測る。ほぼ直立する口縁部はその端部に平坦面を有し、頸部で浅く「く」の字型に屈曲して胸部に至る。口径に比べて器壁は3~4mmと薄いが、器表面には凹凸が目立つ粗い仕上げになっている。風化が激しく、調整については明らかではない。26は口径の約1/2の破片で、胸部下半を欠く。「く」の字状に外半する口縁部はその端部を平らに作り、頸部内面には粘土紐を継ぎ足した段が明瞭に残っている。風化が激しく調整については明らかではないが、口縁部内外面はヨコナデ、胸部の外面はハケメ、内面は先の細いヘラ状工具によるケ



第11図 出土遺物2 (S=1/3)

ズリをそれぞれ行っているようである。27~30は、復元口径8.6~11.5cmの小型の壺で、いずれも胴下半部を欠く。直立する口縁部からゆるやかなカーブを描いて胸部に至るが、30はわずかな屈曲部を有する。器表面が荒れているため調整ははっきりしないが、口縁部の内外面についてはヨコナデによるようである。なお、26の口縁部内面と器表外面及び28・30の器表外面には赤色顔料の痕跡が残っている。31・32は壺の底部で、胎土・色調等から26のタイプの壺の底部になると思われる。どちらも平底であるが、ゆるやかな曲線をもって胸部へと至るもので、外面には赤色顔料の痕跡が見られる。

| 番号 | 種別  | 器種   | 口径     | 底径  | 器高   | 残存度     | 焼成   | 色調     | 調整・特徴・備考                               |
|----|-----|------|--------|-----|------|---------|------|--------|--|
| 1  | 須恵器 | 杯蓋   | (14.0) | —   | 4.7  | 口縁部1/6  | 良好   | 灰色     | 天井部外側へラケズリ(右)・内面不定方向ナデ、他はヨコナデ          |
| 2  | 〃   | 〃    | 13.9   | —   | 4.6  | 完形      | やや不良 | 灰黄色    | 天井部外側へラケズリ(右)・内面ナデ、他はヨコナデ、口縁部内面に横線     |
| 3  | 〃   | 〃    | 14.6   | —   | 4.2  | ほぼ完形    | 良好   | 灰色     | 天井部外側へラケズリ(右)・内面不定方向ナデ、他はヨコナデ          |
| 4  | 〃   | 〃    | 14.2   | —   | 3.8  | —       | やや不良 | 灰黄色    | —                                      |
| 5  | 〃   | 〃    | (15.3) | —   | 4.2  | 口縁部1/3  | 良好   | 灰色     | —                                      |
| 6  | 〃   | 杯身   | (14.0) | —   | —    | 1/2欠損   | 良好   | 灰色     | 底部外側へラケズリ(右)・内面不定方向ナデ、他はヨコナデ           |
| 7  | 〃   | 〃    | (12.9) | —   | —    | 1/2欠損   | 良好   | 灰色     | —                                      |
| 8  | 〃   | 〃    | 14.8   | —   | 3.8  | 完形      | 良好   | 灰色     | —                                      |
| 9  | 〃   | 〃    | 12.3   | —   | 4.5  | ほぼ完形    | 良好   | 灰色     | 底部外側へラケズリ(右)、他はヨコナデ                    |
| 10 | 〃   | 〃    | (12.2) | —   | —    | 口縁部1/8  | 良好   | 灰色     | 内外面ともヨコナデ                              |
| 11 | 〃   | 〃    | (13.0) | —   | 4.5  | 口縁部2/3  | 良好   | 灰色     | 底部外側へラケズリ(右)・内面不定方向ナデ、他はヨコナデ、一部小調整部分あり |
| 12 | 〃   | 〃    | (12.1) | —   | 4.6  | 1/4欠損   | やや不良 | 灰黄色    | 底部外側へラケズリ(右)・内面ナデ、他はヨコナデ               |
| 13 | 〃   | 〃    | (14.0) | —   | —    | 1/2欠損   | 良好   | 灰色     | 底部外側へラケズリ(右)・内面不定方向ナデ、他はヨコナデ           |
| 14 | 〃   | 〃    | —      | —   | —    | 口縁部1/20 | やや不良 | 灰オリーブ色 | 底部外側へラケズリ、他はヨコナデ                       |
| 15 | 〃   | 〃    | —      | —   | —    | 口縁部1/12 | 良好   | 灰白色    | 内外面ともヨコナデ                              |
| 16 | 〃   | 甕    | —      | —   | —    | 口縁部1/12 | 良好   | 褐灰色    | 瓶部に外目                                  |
| 17 | 〃   | 壺    | 16.0   | —   | 5.8  | 完形      | 良好   | 灰色     | 天井部外側へラケズリ(右)、他はヨコナデ                   |
| 18 | 〃   | 有蓋高杯 | 13.9   | —   | —    | 杯部ほぼ完形  | 良好   | 灰色     | 底部外側へラケズリ(右)・内面不定方向ナデ、他はヨコナデ           |
| 19 | 〃   | 無蓋高杯 | (14.0) | —   | —    | 2/3欠損   | 良好   | 灰オリーブ色 | 内外面ともヨコナデ                              |
| 20 | 〃   | 甕    | —      | —   | —    | 口縁部1/20 | 良好   | 灰色     | 瓶部外側平行叩き、内面同心円叩き                       |
| 21 | 〃   | 〃    | —      | —   | —    | 口縁部1/20 | 良好   | 灰色     | 瓶部外側に板状工具による文様                         |
| 22 | 〃   | 短颈壺  | 8.2    | —   | 10.4 | 完形      | 良好   | 灰白色    | 胴下半部へラケズリ(右)、他はヨコナデ                    |
| 23 | 〃   | 平瓶   | 4.8    | 6.8 | 11.0 | 完形      | 良好   | 灰黄色    | 底部外側へラカスリの後ナデ、他はヨコナデ<br>肩部に一対の円形突起     |
| 24 | 土師器 | 高杯   | (17.3) | —   | —    | 杯部ほぼ完形  | 良好   | 明赤褐色   | 内外面ともヨコナデ                              |
| 25 | 〃   | 壺    | (11.5) | —   | —    | 2/3欠損   | 良好   | 明赤褐色   | —                                      |
| 26 | 〃   | 〃    | (16.3) | —   | —    | 1/2欠損   | 良好   | 明赤褐色   | 口縁部外側ヨコナデ、瓶部外側ハケメ・内面へラケズリ              |
| 27 | 〃   | 〃    | (8.7)  | —   | —    | 口縁部1/4  | 良好   | にぶい黄橙色 | 口縁部外側ヨコナデ                              |
| 28 | 〃   | 〃    | (8.6)  | —   | —    | 口縁部1/4  | 良好   | 橙色     | 外側に赤色顔料                                |
| 29 | 〃   | 〃    | (9.6)  | —   | —    | 5/6欠損   | 良好   | 明黄褐色   | —                                      |
| 30 | 〃   | 〃    | (11.5) | —   | —    | 口縁部1/6  | 良好   | 明赤褐色   | 口縁部外側ヨコナデ<br>器表面に赤色顔料                  |
| 31 | 〃   | 〃    | —      | 6.4 | —    | 底部完存    | 良好   | にぶい黄橙色 | 外側に赤色顔料                                |
| 32 | 〃   | 〃    | —      | 5.0 | —    | 底部完存    | 良好   | にぶい黄橙色 | 外側に赤色顔料                                |

土器観察表

口径・底径・器高の単位はcm。( )は復元値

## 鉄器(第12図)

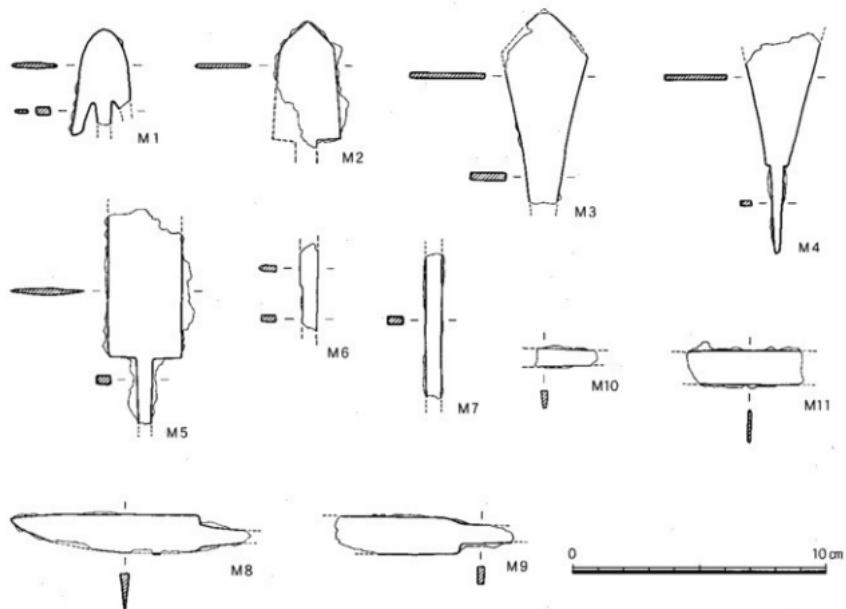
## 鉄鎌(M 1~M 7)

鎌身部を残すもの6点、茎部だけのもの1点の合計7点が出土した。これらのうち、石室床面直上からは6点が検出されているが、M 6・M 7は同一地点からのもので同一個体の可能性もある。

M 1は閉塞石中から出土した腸抉柳葉式の鉄鎌で、逆刺の一部と鎌身下端部を欠いている。逆刺は比較的深く、逆刺部に最大幅をもつ。残存長4.1cmで、鎌身長2.8cm・逆刺長1.9cmを測る。M 2は長三角形の鎌身を持つものと思われるが、下半の一部を欠いている。鎌身関部はほぼ直角で、鎌身長4.7cmを測る。M 3は切先が山形をなす主頭式で、鎌身が長く延びるタイプのものである。最大鎌身幅は、3.4cmを測る。M 4はその形状からM 3と同様主頭式と思われるが、鎌身上半部を欠損しており、切先が直線状となる方頭式の可能性もある。M 5は直角の鎌身関部を有し、直線的に延びる鎌身はその先端部分を欠くが、方頭形ないしは長三角形をなすものと思われる。鎌身幅2.9cmを測る、大形の鎌である。M 6は片刃の長頭鎌で、鎌身上半部を欠く。鎌身関部はわずかに認められる程度で、鎌身幅は7mmを測る。M 7は頭部のみの破片で、断面は長方形を呈する。

## 刀子(M 8~M 10)

M 8は石室床面から出土したもので、茎部の一部を欠く以外はほぼ完形である。現存長は9.5cmを



第12図 出土遺物3 (S=1/2)

測り、刀身部は平造りで長さ7.5cm・幅1.6cm・厚さ4mmで、棟側に明瞭な闊を形成する。茎部の残存長は1.9cmであるが、銹化のため断面形は確認できない。M9は玄室の擾乱土中から出土したもので、刀身の前半部と茎部の一部を欠いている。刀身部は銹化により断面形を確認できないが、幅は1.5cmを測り刀部側に明瞭な闊を有する。茎部は残存長2.0cmで、断面は幅7mm・厚さ3mmの長方形を呈する。M10は茎部の破片で、残存長2.5cm、断面は台形状を呈する。

#### 不明鉄器(M11)

玄室内の埋土中より出土したもので、現存長4.5cm・幅1.5cm・厚さ0.15cmを測る。小形の手鎌の可能性もある。

#### 古墳に伴わない遺物(第13図)

##### 石鎌

北東区の地山直上自然堆積土から、縄文時代のものと思われる石鎌が1点出土している。サヌカイト製の凹基式で、風化が著しい。長さ1.17cm・幅1.16cm・厚さ0.31cmと小形で、重量は0.5gを量る。



第13図 石鎌(S=1/1)

## 第4章 まとめにかえて

古城池南古墳は、ほぼ西側に開口する片袖の横穴式石室を内部主体とする円墳である。墳丘は流出や削平により原状をあまり留めておらず、石室内部も盗掘を受けるなど残存状況はそれほど良いものではなかったが、以下発掘調査により明らかになった点を整理しまとめにかえたい。

### 古墳の年代

今回石室内から出土した遺物は、全て盗掘等により二次的に移動しており原位置を保っていると思われるものはなかった。したがって、その出土状況から時期差を想定することは困難であるため、ここでは須恵器の編年を基に古墳の年代について考えてみたい。

まず、今回出土した須恵器の杯類については、その形態的特徴から杯蓋を2タイプ(I類・II類)、杯身を3タイプ(I～III類)に分けた。これらのうち杯身のIII類を除いては、調整方法や口径などからそこに明確な時期差を認めるることは困難で、ほぼ同一時期のものと考えて良いと思われる。今一度これらの特徴について整理してみれば、杯蓋については口径が13.9～15.3cmで、天井部と口縁部の間には稜が認められず、口縁端部は杯蓋2でその内面に鈍い稜が見られるものの他は全て丸くおさめている。調整は、外面の1/2～1/3にヘラケズリを行い、天井部内面には不定方向のナデが見られるものが多い。杯身については口径が12.1～14.0cmで、たちあがりの断面は全て丸くおさめている。調整は、外面の2/3～1/2にヘラケズリを行い、底部内面には不定方向のナデが見られるものが多く、他はヨコナデにより仕上げている。これらの特徴を陶邑の編年<sup>(1)</sup>に当てはめれば、一部にやや古い要素が見られるもののおむねTK-43の範疇におさまるものと思われる。県内の編年で言えば、ほぼ稼山1期<sup>(2)</sup>の特徴を有していると思われ、実年代では6世紀後半でもやや中頃に近い時期を考えたい。

次に杯身のIII類(杯身15)については、小片のため口径は復元できなかったが、器壁の厚さから考えてかなり小さいと思われ、極端に内傾するたちあがりは短く受部よりわずかに高いにすぎない。このような特徴は、杯蓋と杯身の形態が逆転する直前の時期のものと思われ、陶邑の編年ではTK-209、稼山古墳群の編年では稼山3期～4期、また寒風古窯址群<sup>(3)</sup>ではA類に含まれると考えられる。実年代としては7世紀初頭ないしは前半頃としておきたい。

有蓋高杯18は脚部以下を欠くが、その形状から長脚2段透かしであった可能性が高い。たちあがりはやや内傾が強いものの口径は13.9cmと大きい。これとセットとなる蓋17は、天井部と口縁部の境に一条の凹線が見られるが、口縁端部は丸くおさめ内側には段をもたない。天井部中央にはやや偏平なボタン状のつまみが付き、外面の1/2強にヘラケズリを施している。これらの特徴は、TK-10頃とされる倉敷市金浜古墳<sup>(4)</sup>や総社市綠山6号墳<sup>(5)</sup>出土の有蓋高杯及びその蓋と比べれば後出的な感が強く、ほぼTK-43に併行すると考えられる。また、無蓋高杯19は口縁部のみの破片であるが、口径は14.0cmに復元できる比較的大きなもので、直線的に広がる杯部をもつ。底部と口縁部の

境にはシャープな凹線が一条巡っている。おそらく長脚2段透かしと思われるこの高杯は、おおむねTK-43の範疇におさまると考えられる。

以上見てきたように、今回出土した須恵器が示す年代は、6世紀中頃に近い後半と7世紀初頭から前半にかけての二つの時期であった。前者が示す年代は、後に述べるように横穴式石室の構造が示す時期とも矛盾はなく、したがって6世紀後半でも中頃に近い時期を古城池南古墳の築造時期としたい。また、後者の示す時期を追葬の時期とすることができるが、初葬と追葬の間が約半世紀近くあることや盗掘等による遺物の消失を考えて、ここでは最低1回の追葬が7世紀初頭から前半にかけて行われたと述べるに留めたい。

#### 横穴式石室の規模と構造

古城池南古墳は、6世紀後半でも中頃に近い時期に築造されたもので、吉備地域において横穴式石室を有する古墳の中では比較的古いものである。実際、地域的に見て本墳と近い時期に築造されたものでその内容が明らかになっている古墳は、先に述べた金浜古墳、緑山6号墳の他には總社市すりばち池3号墳<sup>(6)</sup>などごくわずかしか知られていない。これらはいずれも6世紀中頃の古墳で、時期が若干さかのぼるが、これらの古墳と比較することで本墳の石室の特徴についてまとめてみたい。

古城池南古墳の玄室は、長さ3.9m・奥壁での幅1.7m・高さ1.8mを測る。石室が一回り小さいすりばち池3号墳を除けば、玄室の長さについてはそれほどの差がないが、幅については最大の緑山6号墳で2.5m、最小の本墳で1.7mと0.8m程の差があり、結果として玄室の長さをその幅で割った比率(以下、玄室比率)にも大きな差が出ている。一般的に、時代が下るにつれ玄室比率が高くなると言われており、この点では、他の3古墳より時期の新しい本墳の玄室比率が最大であることに矛盾はない。羨道部の平面形態については、短小なものから長大なものへと徐々に変化するとされ、6世紀中葉前後の古墳では短めの羨道部を有する場合が多い。古城池南古墳の羨道部も、長さ2.5m・幅1.0mと玄室の大きさに比べ小さなもので、緑山6号墳のそれと比べれば、平面プランのみならず高さも含めた立体的なプランまでもほぼ同じであるが指摘できる。

次に石室の構築状況について見てみよう。石室に使用する石材についても、時代が下るにつれ小形で扁平なものからより大きなものへと変わってくるが、主として横長で高さの低い石材を使用している古城池南古墳は、この時期の特徴を良く示していると言える。また、石材の積み方については、玄室と羨道とでは明らかな

差が見られた。すなわち、横長の石材を順序良く積み上げている玄室に比べ、羨道部では不定形の石材を乱雑に積み上げており、玄室と羨道部に対する意識の差が感じられる。このような玄室と羨道における構築状況の

石室規模比較表

|          | 玄室  |     |       |                | 羨道部   |     |       |
|----------|-----|-----|-------|----------------|-------|-----|-------|
|          | 長さ  | 幅   | 高さ    | 玄室比率<br>(長さ/幅) | 長さ    | 幅   | 高さ    |
| 金浜古墳     | 3.6 | 2.0 | —     | 1.8            | (1.4) | 0.9 | —     |
| 緑山6号墳    | 3.7 | 2.5 | 2.1   | 1.5            | 2.5   | 1.1 | 1.3   |
| すりばち池3号墳 | 2.5 | 1.2 | (1.3) | 2.1            | —     | —   | —     |
| 古城池南古墳   | 3.9 | 1.7 | 1.8   | 2.3            | 2.5   | 1.0 | (1.3) |

単位はいずれもm・( )は推定値

差は、すりばち池3号墳ではより明らかな状況であるし、金浜古墳や緑山6号墳においても少なからず認められるものである。さらに、これら3古墳では玄室と羨道を物理的に区切る境界石の存在が報告されている。この境界石はいずれもその基部が石室床面に埋め込まれており、明確な意図をもって設置されたことがわかるが、その状況は古墳によりやや異なっている。金浜古墳では、0.7×0.5mの平たい石を石障のようにして立てていたのに対し、他の2古墳では横長で高さの低い石材を利用しており、その上面は床面からわずか10~20cm程度にすぎない。金浜古墳は、同じ6世紀中頃の築造でも他の2古墳より若干さかのぼると考えられており、最も新しい本墳においてはこの境界石は確認されていない。したがって、わずかな例からではあるが、このような境界石のあり方の差はおおまかな時期差を示していると思われる。

このように、古城池南古墳における横穴式石室の規模と構造は、一般的に言われる古式の横穴式石室の特色を良く残しつつも、玄室が細長く羨道部の付け根に境界石を持たないなどより新しい要素も見られるもので、出土須恵器から得られた築造年代とも合致するものである。

#### 古墳の被葬者

古城池南古墳は、現在までのところ金浜古墳に次いで倉敷市では二番目に古い横穴式石室墳である。副葬品の多くは盗掘により既に消失したと思われ、被葬者の性格を直接反映するような遺物は残っていないかった。したがって、間接的ではあるが周辺の古墳との関係から考えてみたい。

まず、古城池南古墳が造られる少し前の6世紀の中頃に、直線距離で南へ7km程の地点に金浜古墳が築造されている。金浜古墳は、かつての児島の西岸、標高約39mの小尾根上に存在した古墳で、眼下の海岸沿いには製塩遺跡である金浜遺跡が南北にのびていた。出土遺物には、鉄鋸や鉄ヤス、鉄釣針など漁労に関するものも含まれており、古墳の被葬者は、製塩のみならず海との関わりが強かった人物と考えられている。また、古城池南古墳から南へ約2.5kmの地点に、6世紀後半から末頃にかけて湾戸7号墳<sup>(7)</sup>が造られた。金浜古墳と同様、足下の砂州上には古墳時代の製塩遺跡である湾戸遺跡が存在し、出土遺物には鉄ヤスも含まれることから、製塩や漁労を生活基盤としていた集団の長を古墳の被葬者と想定している。

このように、かつての児島の西岸においては砂州ごとに海浜生活を営む集団が形成され、その背後の丘陵上にそれぞれ古墳が築かれる状況が一般的に見られる。今回調査を行った古城池南古墳も、これらの古墳とまったく同様の立地を持つことから、本墳の被葬者も製塩や漁労など海との関係が強い集団の長であった可能性が高いと言えよう。

註(1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

(2) 村上幸雄ほか『轟山遺跡群II 古墳・墳墓編』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980年

(3) 山崎康平『寒風古窯址群』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27』1978年

(4) 間壁忠彦・間壁貢子ほか『金浜古墳』『広江・浜遺跡』倉敷市教育委員会 1979年

(5) 近藤義郎・北條芳隆編『緑山古墳群』総社市文化振興財團 1987年

(6) 高田明人『すりばち池3号墳』『総社市埋蔵文化財発掘調査報告1』総社市教育委員会 1984年

(7) 片岡弘至『湾戸7号墳』『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第7集』倉敷市教育委員会 1998年

# 図 版



1. 遺跡遠景

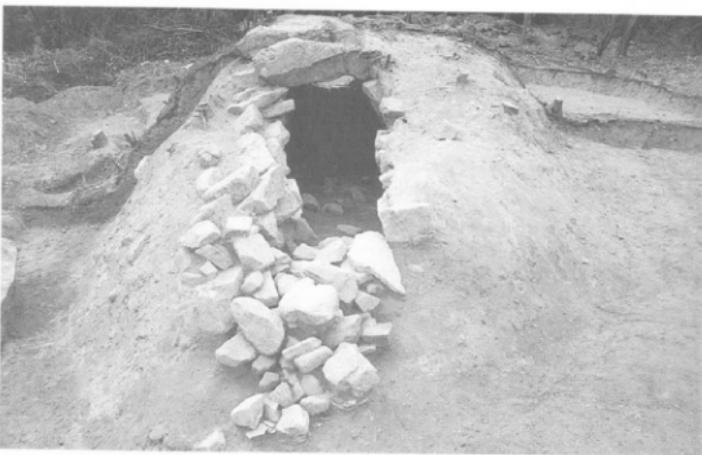


2. 調査前の状況  
(西から)



3. 調査前の状況  
(南から)

図版2



1. 填丘検出状況  
(西から)



2. 閉塞施設(西から)



3. 閉塞施設(東から)



1. 石室床面検出状況

2. 遺物の出土状況  
(羨道部)

3. 遺物の出土状況  
(玄室)



図版4



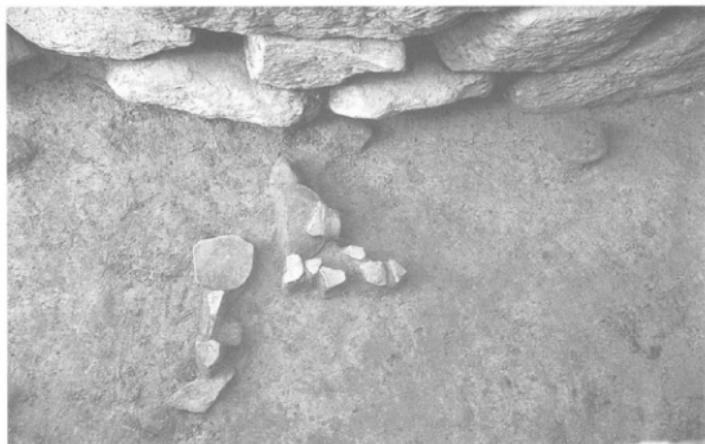
1. 遺物出土状況(1)



2. 遺物出土状況(2)



3. 遺物出土状況(3)



1. 遺物出土状況(4)



2. 遺物出土状況(5)



3. 遺物出土状況(6)

図版6



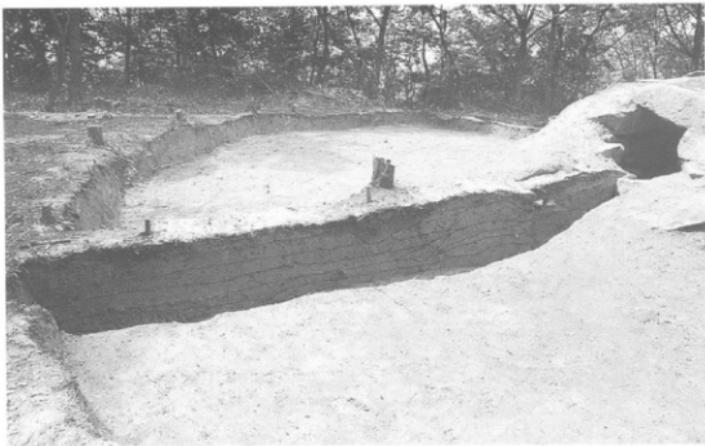
1. 遺物出土状況(7)



2. 遺物出土状況(8)



3. 棺台石



1. 土層断面(東側)



2. 土層断面  
(奥壁部分)



3. 土層断面(南側)

図版8



1. 墳丘断面(北側)

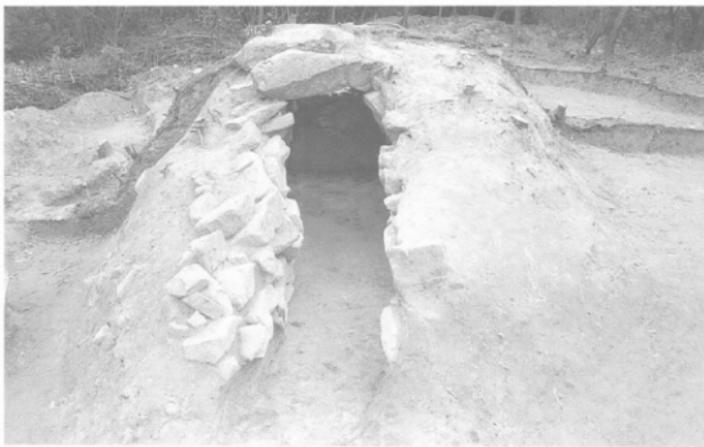


2. 側壁断面(北側)

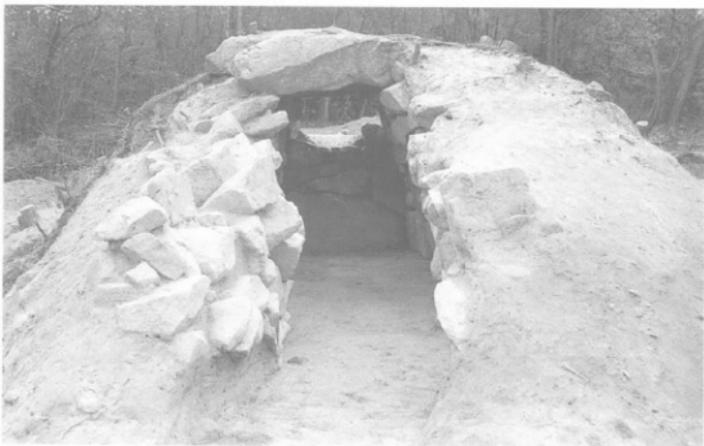
3. 墳丘断面(南側)



4. 側壁断面(南側)



1. 古墳全景

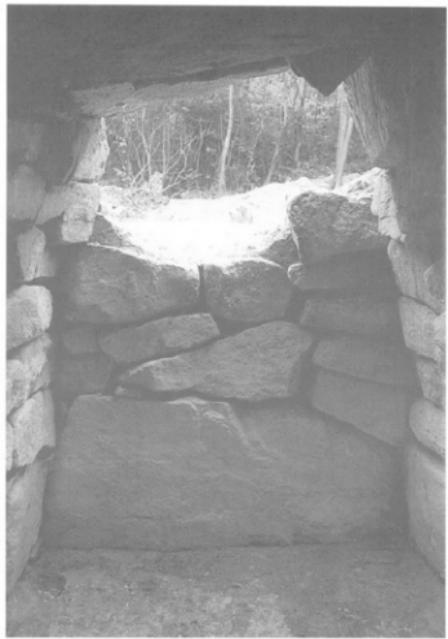


2. 調査終了後



3. 横穴式石室

# 図版10

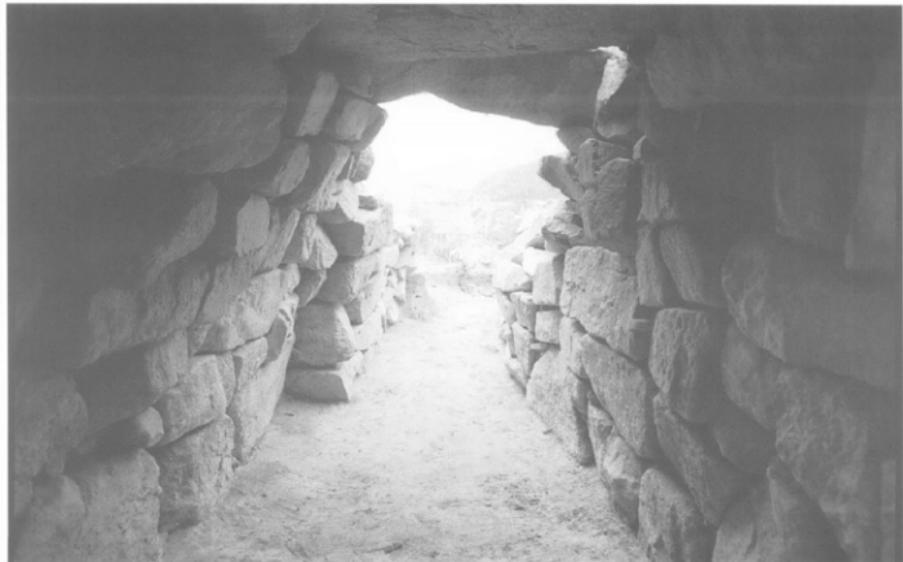


1. 横穴式石室(奥壁)



2. 横穴式石室(袖部分)

3. 横穴式石室(奥壁から)





2



3



4



5



6



7



8



9



11



12

図版12 出土遺物(2)



13



22



17



18



23



19



21



24



26



27



30



29



25



M1



M2



M3



M4



M5



M6



M7



M9



M11



M8

## 報告書妙録

| ふりがな                   | こじょういけみなみこふん                                 |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
|------------------------|--|------------|------------|-------------------|--------------------|-----------------------|--------------------|-----------------------|
| 書名                     | 古城池南古墳                                       |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
| 副書名                    |  |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
| 卷次                     |  |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
| シリーズ名                  | 倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告                               |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
| シリーズ番号                 | 第9集  |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
| 編著者名                   | 鍼谷守秀・片岡弘至                                    |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
| 編集機関                   | 倉敷埋蔵文化財センター                                  |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
| 所在地                    | 〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地 TEL 086-454-0600 |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
| 発行年月日                  | 2000年3月31日                                   |            |            |                   |                    |                       |                    |                       |
| ふりがな<br>所収遺跡名          | ふりがな<br>所在地                                  | コード<br>市町村 | 北緯<br>遺跡番号 | 東経<br>° ° °       | 調査期間               | 調査面積                  | 調査原因               |                       |
| こじょういけみなみこふん<br>古城池南古墳 | おかやまけんぐらしきし<br>岡山県倉敷市<br>ふくだちようふくだ<br>福田町福田  | 33202      | 07-002     | 34°<br>32°<br>48° | 133°<br>46°<br>02° | 19900319～<br>19900510 | 200 m <sup>2</sup> | 道路拡幅工事<br>に伴う発掘調<br>査 |
| 所収遺跡名                  | 種別   | 主な時代       | 主な遺構       | 主な遺物              |                    |                       | 特記事項               |                       |
| 古城池南古墳                 | 古墳   | 古墳         | 横穴式石室      | 須恵器・土師器・鉄鏃・刀子     |                    |                       |                    |                       |

**古城池南古墳**  
倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第9集

平成12年3月31日 印刷発行

編集・発行

倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地

TEL 086-454-0600

The Excavation Report  
Of  
KOJOUIKE MINAMI KOFUN In Mizushima

---

Volume 9

Kurashiki  
Archaeological Center

---

March 2000